

季
刊



KIKAN
KADENSHA
vol.09
2017/11/1

人形劇が人を虜にする理由

人形は人間にできない劇的な動きができますね。二次元のアニメと違い、人形は現実の中で非現実的な動きが見られるのが面白いところ。そのとき見る人に想像力を働かせます。マントのはためきは、空をとんでいることを想像させます。顔のパーツは動かなくても、怒ったり笑ったりして見えてくるのです。フィクションのリアルな存在感と湧き上がる想像力。これが人形劇の魅力で、アニメ、映像、演劇などの他の芸能ではできない表現です。

その存在感と芽生えた想像から、つい子どもは人形に声を掛けてしまいます。そして舞台と子どもの双方向コミュニケーションが生まれるのですが、この時こそ人形劇の真骨頂。たとえ大きな劇場でも、遠くの小さな人形と子どもの心理的距離はすごく近い。

そんなゲームでは得られないリアルな感情のやりとりが、お母さんお父さんにも支持されて、いま公演の機会は少しづつ増えています。各地の文化施設でも、人形劇を開くことがその施設のウリになるような、そんな時代が始まっています。

山根起己 (人形劇団ポボロ制作)

2017年 第45回 夏休み 児童・青少年演劇フェスティバル

役者たちの演技に大興奮!

笑いと涙と感動をあなたに!

2017年7月22日(土)~8月27日(日)

会場=全労済ホール／スペース・ゼロ&ブーク人形劇場、

芸能花伝舎

主催=日本児童・青少年演劇劇団協同組合(児演協)

共催=全労済

協力=芸団協、一般社団法人新宿観光振興協会

日本児童・青少年演劇劇団協同組合が主催する「夏休み 児童・青少年演劇フェスティバル」。第45回となる今年は会場に芸能花伝舎も加わり、児童向け専門劇団による9つのワークショップと22公演が企画された。

8月24日の芸能花伝舎の会場をのぞいてみると、「ピエロってどんな特徴があると思う?」と問う声に、子どもたちが「赤い鼻!」「髪がもじやもじやー!」と反応する声が聞こえる。創造スペース(A1)では「ピエロになろうワークショップ」(劇団汎マイム工房)の真っ最中。パントマイムの練習では、「近くの人と3人組を作つて。その3人で、トイレとトイレットペーパーになってみて」「今度は5人組。5人で三輪車になって動いて」など、次々出される難問にお母さんたちも一緒になって大わらわ。頭と体を目いっぱい使ってピエロの修行を積んでいた。

一方、体育館中央にステージを配した特設円形劇場で行われていたのは、劇団風の子による舞台「陽気なハンス」だ。登場口が三ヵ所あるため、役者がどこから出てくるのか、効果音がどこから聞こえるのか、目を凝らし、耳を澄まして会場全体を見渡す子どもたち。おばけに怯える子、食事のシーンでは「見てみたい!」と立ち上がる子もいて、大いに盛り上がった。

子どもたちが役者たちと交流し、生の舞台の臨場感に触れられる同フェスティバル。こうした機会を続けていくことこそ、豊かな文化に満ちた社会の基盤となっていくはずだ。



「ピエロになろうワークショップ」
最後にピンポン玉を切って「つけ鼻」を手作りしたら、立派なピエロに変身!



8月23日の体育館公演は、オペレッタ劇団ともしひの「トラの恩がえし」。毎日いろんな舞台が楽しめました。



「陽気なハンス」は6人の役者が生演奏や黒衣も担当。のこぎりや靴底など、さまざまな物を使った効果音に注目する子も。井戸から本物の水が出てきたり、テーブルに本物の食べ物が出てきたりするたび、子どもたちの歓声が上がる。

3時間目の授業は「伝統文化」

東京オリンピック・パラリンピックを契機に自国の伝統文化に対する理解を深めようと、新宿区教育委員会では区内の小学校を対象に「伝統文化理解教育*」を実施しています。新宿区は人口の約1割を外国人住民が占めるほか、統計では小学校の外国人児童が総児童数の4%を超えるなど、まさに“多文化共生のまち”です。

授業で実演家が教えるのは、知識や技術ではなく、多様な文化や考えが行き交う中で大切な、アイデンティティと誇りです。「自分の住むまちや文化について、自分の言葉でひとに伝えられることは、とても尊敬されること」と伝えます。落語でころげるように笑う様子は、ないものがあるように

見えている、想像できているということ。かつて、心や魂など見えないものへの想像が人間の至上とされたことを学びます。日本舞踊では、はじめて浴衣をきて正座でいさつ。相手への思いやりを美とした、日本人の大切な感性と出会います。

子どもたちは、伝統芸能にこめられた、人から受けたあたたかな気持ちを、まわりの人へ伝える、そんな古えからのメッセージを感じとっているようです。

*伝統文化理解教育…新宿区立の小学校29校の3年生から6年生を対象に、能楽(狂言)、落語、和妻、日本舞踊を年度ごとに各校1ジャンル実施。2016年からの4年間で全ジャンルを体験するもの。

「約650年、言葉がそのまま残り受け継がれているのに驚いた」(狂言)

児童アンケートより

「独自の手品がある国が、世界でも中国、インド、ロシア、日本の4か国だけなんてすごい」(和妻)



実演芸術ネットワーク

人や組織をつなげて、実演芸術を支える

地域の人々と文化芸術をつなげる、それぞれのアーツマネジメント

豊かな芸能が根付く沖縄、この地に住む人々や来訪者が文化芸術を楽しむ仕掛けをつくるには。アーツマネジメント人材を育てるために始まった沖縄県アーツマネージャー育成事業では、8月29日、昨年度の研修派遣修了者の報告とあわせ、特別講座トークセッション「地域コミュニティと芸術～場づくりを支える」が開催された。

琉球舞踊の立案で制作者としても活動する砂川政秀さんは、KAAT神奈川芸術劇場で5か

月半研修。複数の公演に携わり、川崎市の沖縄県人会ともつながったことで、県内外での企画や広報の幅が広がった。犬塚拓一郎さんは、三陸国際芸術祭の事務局で3か月研修。誰でも参加できる楽団を結成し、芸術体験を通してコミュニティをゆるやかにつなぐ活動を実践している。2人ともこれまでと違う環境に身を置くことで、得たものは大きいようだ。

続くトークセッションでは、三陸国際芸術祭、

音まち千住の縁(東京都足立区)のアートプロジェクト、沖縄市の音楽によるまちづくりの取組を紹介。三陸国際芸術祭は、スタッフ体制が例年課題という。震災の被害により、著しく住民が減少してしまったため、ボランティアの確保が難しい。足立区でも、インターンで参加した学生が仕事として続ける割合は低い、と人材について悩みは多い。ただ、関わり方は様々、沖縄市では社会貢献的な面での人材確保も視野に入れ



ている。一方、プロジェクト継続の鍵となるのは、資金調達力。人材育成もさることながら、文化事業を行うにあたっての国や地方行政の仕組みも整備してほしい、という意見も。詳細レポートは、ウェブサイトをご覧ください。

<http://www.geidankyo.or.jp/okinawa>

「日本の将来を担う大事な宝物である子どもたちが、
大事な宝物である日本の伝統芸能を学ぶ、
こんなに素晴らしいことはない」と開講式で語る
野村萬芸団協会会長（9月24日、国立能楽堂）



発表会の幕が上がる直前の子どもたち。
期待と緊張に満ちた一瞬。
(2015年度、長唄囃子[小鼓]の発表会)



いつもとちがう、自分を見つける —10年目を迎えた「キッズ伝統芸能体験」

主催＝東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、芸団協
企画制作・運営＝芸団協
制作協力＝公益社団法人能楽協会、公益社団法人日本舞踊協会、
公益社団法人日本三曲協会、一般社団法人長唄協会

2008年初夏、東京。かつてない規模の子ども向け本格的伝統芸能体験がスタートした。“和のお稽古事”として伝統のある能楽・日本舞踊・三曲・長唄の4つの領域で、プロの実演家から直接学び、本格的な舞台での発表を目指すプログラムだ。事業コンセプトは、「本物体感」「日本的感觉の涵養」「伝統芸能の価値の再発信」。

この夏、芸団協では、10年の軌跡を振り返り、事業の未来図を描く試みを始めた。第一歩は、過去の参加者へのアンケート*。約3,000人にメールやFBを通じて、「この体験が今の自分に活かされていることは?」と尋ねた。初年度に参加した小学1年生は、今や高校1年生。自らの言葉で、この体験の意義を語ってくれた。「着物の着付けが得意」「姿勢が良いと褒められる」「好奇心の入り口になった」「形ばかりでない礼儀作法が身に着いた」「お稽古を続けている」「体験しなければ一生教科書上の知識でしかなかった」「母もお稽古を始めた」等々。なかでも目立ったのは海外への眼差しだ。転勤で海外移住した子ども、留学した子ども、これから留学する子ども。それぞれに自分の立ち位置を意識し、日本以外の文化への敬意と関心を持つきっかけになっている様子が見て取れる。そのために英語をしっかり勉強しているという子ども。

何気ない日常生活のなかに伝統文化が今なお息づいていること、人生を切り開くための道筋となることに、自ら気づき始めた子どもたち。その存在は実に頼もしい。伝統芸能だからこそ、彼らの深層世界を揺り動かすことが出来る。そんな手応えを感じる。

*アンケート結果を含め、10年の軌跡と今後の展望は、来春以降冊子とウェブ上で公開予定

キッズ伝統芸能体験とは

子どもたちが一定期間にわたり、伝統芸能の一流の実演家から直接指導を受け、最後にその成果を本格的な舞台で発表します。「本物体験」を通じて、日本人が大切にしてきた伝統文化への理解を深め、その心を次世代へ継承することを目的としています。東京2020公認文化オリンピアード認証事業。www.geidankyo.or.jp/kids-dento

10月・11月は、新宿フィールドミュージアム月間!



9/26にプレオープニングイベントを開催

新宿のまち全体が、アート&カルチャーイベントの博物館になる2か月間がスタートしました。芸術の秋、新宿区内で行われるたくさんのイベントをまとめたガイドブックを配布しています。作成は、区内の104団体で構成される新宿フィールドミュージアム協議会。一部会場ではスタンプラリーも。ウェブサイトでも情報発信していますので、ぜひご覧ください。

<https://www.sfm-shinjuku.jp/>

[花伝舎カレンダー] 芸能花伝舎を拠点に展開している事業いろいろ

新宿区秋の文化体験プログラム

気軽に本格的な文化芸術体験ができるプログラム。18歳以上の大人向け、参加費100円です。

11/16(木)はじめてのジャズダンス

11/17(金)時代劇の殺陣に挑戦

11/20(月)あでやかな日本の音色、お箏



11/23(木祝) こども芸能体験ひろば

三味線、狂言、落語、和妻、日本舞踊の中から好きなジャンルを1つ選んで体験できるワークショップ。各界のプロが直接レクチャーを行います。

<http://www.geidankyo.or.jp/12kaden>

12/7(木)

実演芸術国際 シンポジウム2017

全国の子どもたちに
芸術体験を届けるために

会場:国際文化会館 講堂

スウェーデン、アルゼンチン、
日本での児童演劇の広がり
を紹介しながら、今後の展開
について考えます。

(日英同時通訳)

<http://www.geidankyo.or.jp/renkeikoryu/>

ご支援のお願い

より良い稽古環境と子どもたちに良質の芸能体験を提供し続けること。この二つは、芸能花伝舎の運営に携わる私たちの願いです。将来にわたって持続するためには、皆様のご支援が必要です。是非、ご寄付をお願いいたします。<http://geidankyo.or.jp/support/>

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会

● 東京オペラシティ事務所

〒163-1466 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー11階
Tel:03-5353-6600 Fax:03-5353-6614

● 芸能花伝舎事務所

〒160-8374 東京都新宿区西新宿6-12-30
Tel:03-5909-3060 Fax:03-5909-3061